

1960年代前半のアメリカは輝いていた。映画館で見る「風と共に去りぬ」や「ティファニーで朝食を」は、その作品の内容はともかく、その豊かさ、美しさ、大きさが何より私を魅了した。

私はそのころNHKに入り、プロデューサーとして田崎先生の英会話を担当することになった。田崎先生は東京教育大学英文科の私の先輩で、すでにミシガン大学で有名なフリーズ博士のところで英語教育法を学んできたアメリカ帰りであった。

私も一応英文科の出身で、英語は読めた。大学に入ったとき神田の三省堂で洋書というものはじめてみた。それまでは南雲堂などの教材で、漢文を読み下すように英語を読み下していた。英語を原文で英語として読み下させるようになったのは三省堂で買った初めての洋書 Modern Library の "Of Human Bondage" by Somerset Maugham を辞書なしでどれだけ読めるか読んでみようかと決意したときからである。わからないところも多かったが、私は初めて英語の本を英語で読んだという感覚をつかむことができた。

しかし、書いたり、話したりすることとなると、幼稚園程度だったように思う。芸大のピアノ科にはいれば、ピアノを弾けるはずだ。しかし、私はといえば英文科を出ながら英語で自分を表現することができない。同級生も似たりよったりだった。これは何かおかしいと感じていた。英語を流暢に話す田崎先生のようになりたいと思っていた。

そして、英語を話せるようになるには、田崎先生のようにアメリカで勉強しなければだめなのかと思うようになった。私は身の程も忘れてフルブライトの試験を受けてみることにした。もちろんダメモトである。私はプロデューサーとしてはまだ駆け出しで、先輩からは「番組もまだ一人前につくれないのに、」もう少し待ったらどうか、というような忠告も受けた。確かにテレビの番組作りは in service training (丁稚奉公) で、学校で教わっているわけでもないので、先輩から学ぶよりほかに方法はなかった。

番組を企画し、フィルムで撮影し、編集し、構成し、コメントをつけて、必要な場合には効果音や音楽をつけて、アナウンサーに読んでもらう、というような流れが一般的である。しかし、田崎先生の英会話担当の私はといえば、田崎先生に台本を書いてもらい、スタジオで2週間分の番組を一度に作ることはできなかった。当時英語はおろか日本語でコメントを書く訓練も十分ではなく、しばしばアナウンサーからしかられた。今考えれば「もう少し待ったら」と言ってくれた先輩の方が正解であったと思う。しかし、若いということは無鉄砲であっても許されることであった。

幸いにしてフルブライトの試験は受かった。アメリカの大学は郊外の広々とした田園都市にあるのが普通だ。しかし、私はすでにNHKに入っていてアカデミックの研究をするというよりもアメリカの社会を見たいと思っていた。

小田実の『何でも見てやろう』が当時ベストセラーになっていて、私もアメリカのすべてを見てやろうと思っていたのでニューヨーク大学を選んだ。小田実は東大の言語学科でギ

リシャ古典を学んだ人のはずだが、『何でも見てやろう』では留学先のハーバード大学については「学生たちは日夜電話帳のようなテキストととりくみし、毎週レポートを書き、「クイズ」と称する小試験の波をこえ、その間隙をぬってデートもする」と書いているだけで、ほかにハーバードで見たアメリカやアメリカ人についての言及はない。ハーバードはアメリカの社会とは隔離されたアカデミズムの社会だったのだろう。

当時ニューヨーク大学があるグリニッジ・ビレッジはビート・ジェネレーションと呼ばれる怒れる若者たちの巣窟であった。小田実がグリニッジ・ビレッジの中にアメリカ文明の光と影をみていたのであろう。「私が感じたのは、それは、文明、われわれ20世紀文明の重みであった。」と小田実は書いている。豊饒なる社会のなかで、「アメリカの社会、文明は何かを求めて必死になっているという気がするのである。」という。そのニューヨークで私は一年を過ごすことになった。

大統領はケネディーで希望に満ちた演説で明るい未来を語り、アメリカ人ばかりでなく、世界のリーダーとして人々を魅了していた。しかし、対外的には冷戦があり、国内では公民権法案をめぐる、アメリカは南北に分裂しかねない状態にあった。公民権法案を支持する人の多い北部でも人種的偏見は、あからさまに制度化されていないというだけで、ニューヨークでも WASP(White, Anglo-Saxon, Protestant)ーアイルランド系ーラテン系ーユダヤ系ー中国人・朝鮮人ー黒人という否定しがたい階層があった。1920年代の排日はすでに過去のものであったが、日本人もその階層のどこかに位置づけられていることを意識しないわけにはいかない場面もあった。

太平洋戦争から15年以上経過しているとはいえ、真珠湾攻撃にたいする一般のアメリカ人の感情は sneaky Jap (狡猾な奇襲攻撃をする日本人) というわだかまりを残しており、インテリ層のなかにも、ナチスのユダヤ人虐殺と真珠湾攻撃をファシストの蛮行として同列に考える人が多かった。その考えは日本人である私には違和感がないわけではなかった。

【予告編】

- 第2話 あこがれのハワイ航路
- 第3話 何でも喋ってやろう
- 第4話 ニューヨークの日々
- 第5話 海に火輪を
- 第6話 Back to 1960's
- 第7話 帰国ー日本文化圏再突入
- 第8話 アメリカ再訪
- 第9話 アジア回帰
- 第10話 アメリカ NOW